

週日の説教

金 大烈 神父 2011年10月20日(木)

《火の塊 ～イエス様によって、熱く、明るく～》

歴史を見ると、今日の福音（ルカ 12・49-53）でイエス様のおっしゃった言葉は、まるで預言のように実際に起こっていることが分かりますね。2000年間、多くの国々で数えきれないほどの迫害が続き、今もどこかの国で起こっています。ただイエスを信じる、ということだけで、いろいろな痛みが生じているのです。

2000年前にイエス様が現れた時も、同じ家族の中でもイエス様に心酔している人もいれば、徹底的に反対する人もいたのでしょう。簡単に言えば、そのようなことも分裂だと思えます。

皆様は、イエス様のために身近な人、親戚、家族、兄弟との間で、戦いになったことがありますか？喧嘩や危機を感じるくらい仲が悪くなったことがありますか？無いのでしょうか。それは、イエス様のために頑張っていない証拠かもしれません。今は、子どもたちにさえ遠慮してしまい、伝えられない時代です。イエス様に対して強い信仰を持っていても、その信仰を自分の子どもにさえ言えない時代になってしまいました。兄弟姉妹に、父や母に、「一緒にこの信仰を持ってみましょう。だまされてもよいから信じてみましょう。」という言葉さえかけられないのが、私たちの姿ではありませんか？

今日の福音を読んだら、「神様のために、イエス様のために、苦労したことがあるのか。人とぶつかったことがあるのか。論争したことがあるのか。」と反省しなければならないと思います。もちろん、イエス様のみ旨は「家族と敵になりなさい」というものではありません。この世の中では、必ず自分と考える違う人に出会います。その時に、「持っている宝物を伝えるために努力しなさい。どのようにすればその人に手を伸ばすことが出来るか考えなさい。」というメッセージではないかと思います。

今の時代のカトリック信者は、あまりにもわがままです。自分だけ救われればよい、という考え方が無意識のうちに身についています。しかし、必ず神さまから「私が望んだことを一つでも実践したことがあるのか。あなたによって私のことを好きになった人が何人いるのか。」と問われる日が来ると思います。ですから、自分のことをもう一度振り返ってみて、もっと福音に積極的にならなければいけない、という意欲を持つことが何よりも必要です。それがイエスを信じる人の正しい姿だと思います。

次に違う話を申しあげます。ティヤール・ド・シャルダンというフランス人の司祭をご存知ですか。その司祭が書いた「世界の上で捧げるミサ」という本があります。

今日の福音でイエス様は、「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか。」とおっしゃいましたね。ティヤール・ド・シャルダン神父は、この福音を黙想しながら、ご聖体を『火の塊』と表現しました。「毎ミサをとおしていただける熱くて、燃えている『火の塊』がご聖体である。それが私たちの中に入れば、私たちが燃やされるべきだ。

その光と

その光と熱さによって、周りも徐々にイエス様である『火の塊』になるべきだ。」と書いています。

私たちが、『火の塊』であるイエス様をいただき、その愛に囲まれてこの世を生きることができれば、自然に周りの方々も傾いて来ると思います。それが宣教でしょう。その魅力、説明できない力、カリスマ性、それを皆様みんなが持つべきです。

イエス様をいただいているのですから、いただいたイエス様を活かしてください。それが信仰の一番望ましく、基本的な姿勢であることを今日の福音をとおして考えてみましょう。

ありがとうございました。